

義務教育期における児童・生徒のフィジカルリテラシーの実態調査

ー小学5年生及び中学2年生を対象としたパイロットスタディーー

小坪 朋夏 (岐阜大学)

1. 目的

本研究の目的は、小学5年生及び中学2年生を対象とし、児童・生徒のフィジカルリテラシー(PL)に関する実態を明らかにすることである。

2. 研究方法

1) 対象者

G県M市の小学校に在籍する5年生281名及び中学校に在籍する2年生281名

2) 調査方法

対象者に日本版 Physical Literacy 評価法と独自に作成した項目の全47設問から構成された質問紙調査を行った。

3) 分析方法

学年、性別によるPLの違いを検討するため、対応のないt検定を適用するとともに、効果量(Hedges'g)を算出した。

運動の好嫌度による違いを検討するため、三要因分散分析(学年×性別×運動の好嫌度)を適用し、分散分析において有意な主効果が認められた場合はTukey法の多重比較検定を行うとともに、効果量(Hedges'g)を算出した。

3. 結果と考察

1) 学年によるPLの違い

学年で比較すると、身体的領域では小学校5年生が有意に高く、社会及び認知的領域では中学校2年生が有意に高い結果となった。(表1) 表1 学年における対応のないt検定の結果

	小学5年生 M SD	小学2年生 M SD	t値	P値	対応	乗数修正 Hedges'g ²
身体 ²	37.069 7.667	33.971 8.213	4.498	0.000	↑	0.390
社会 ²	22.445 4.119	22.396 4.453	0.134	0.893		0.012
認知 ²	32.931 5.097	33.798 4.938	2.030	0.043	↑	0.173
総合 ²	29.752 4.907	31.166 4.346	3.571	0.000	↑	0.305
合計 ²	122.305 19.098	121.738 18.102	0.339	0.735		0.031

学年が上がるにつれ、自己を客観的に評価できるとともに、体育・保健の授業を通して社会性が高まり、運動の大切さの理解が深まることが推察された。

2) 性別におけるPLの違い

性別で比較すると、身体、心理的領域及び総合得点において小学校5年生が有意に高い結果

となった。(表2)

表2 性別における対応のないt検定の結果

	男子 M SD	女子 M SD	t値	P値	対応	乗数修正 Hedges'g ²
身体 ²	36.547 8.222	34.523 7.865	2.904	0.003	↑	0.252
社会 ²	23.388 3.938	21.529 4.409	5.142	0.000	↑	0.444
認知 ²	33.173 5.033	33.545 5.034	0.869	0.385		0.074
総合 ²	30.593 4.733	30.352 4.637	0.601	0.548		0.052
合計 ²	123.781 19.019	120.386 18.027	2.040	0.042	↑	0.183

女子よりも運動に積極的な姿勢を示す男子が、PLも良好であることが示唆されたが、体育授業における男女共修化により、男女の差が広がる可能性が推察される。

3) 運動の好嫌度におけるPLの違い

全ての領域及び総合得点において有意な主効果が認められた。また、多重比較検定の結果、総合得点では、「好き」が「どちらでもない」、「嫌い」より有意に高く、「どちらでもない」「嫌い」より有意に高かった。(表3)

表3 運動の好嫌度における三要因分散分析及び多重比較検定の結果

	男子 M SD	女子 M SD	F値	P値	多重比較 ² (乗数修正)
身体 ²	37.550 7.170	29.276 5.224	25.412 6.815	60.771 0.000*	優・揚 r 0.154↑ r 優・下 r 0.226↑ r 揚・下 r 0.072↑
社会 ²	23.759 3.338	18.983 3.327	15.873 3.580	112.833 0.000*	優・揚 r 0.136↑ r 優・下 r 0.225↑ r 揚・下 r 0.089↑
認知 ²	34.032 4.633	31.533 5.739	30.000 5.535	23.669 0.000*	優・揚 r 0.108↑ r 優・下 r 0.174↑
総合 ²	31.279 4.248	28.115 4.259	26.462 5.603	44.738 0.000*	優・揚 r 0.112↑ r 優・下 r 0.170↑
合計 ²	126.719 16.153	108.849 13.944	97.771 15.691	63.407 0.000*	優・揚 r 0.143↑ r 優・下 r 0.232↑ r 揚・下 r 0.089↑

運動が好きである児童・生徒ほど、良好なPLを有することが示唆された。

4. 結論

本研究において、PLには学年差、性差及び運動の好嫌度による差がみられることが明らかとなった。よって、学年、性別及び運動の好嫌度によるPLの違いを考慮し、子どもへの運動・スポーツへの関わり方を考える必要があると考える。

5. 主な参考文献

- 1) 青野博, 鈴木宏哉, 春日晃章 (2023): 2-2 若年層(高校生)を対象とした Physical Literacy に関する実態調査, 令和4年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告II, 身体リテラシー(Physical Literacy)評価尺度の開発第一第2報—